

Title	<書評リプライ>別所裕介氏の書評へのリプライ
Author(s)	小西, 賢吾
Citation	コンタクト・ゾーン = Contact zone (2017), 9(2017): 443-445
Issue Date	2017-12-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/228339">http://hdl.handle.net/2433/228339</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 別所裕介氏の書評へのリプライ

小西賢吾

まず、評者の別所裕介氏に、拙著をここまで丹念に読み込み、的確な書評をいただいたことを心から感謝したい。中国四川省シャルコク地方とボン教という、地域としても対象としても相当狭い範囲にフォーカスが集中している拙著の内容を、より広い問題系に位置づけて論評してくださったことによって、視界が一気に開かれた感覚をおぼえた。当該地域の文脈を十分に踏まえつつ、より普遍的な問題系に接続した議論を展開することは、アムド・チベット研究の先達である評者にしかできないといっても過言ではなく、多くのことを学ばせていただいた。それは今後の研究の方向を模索する筆者にとっても、拙著を手にとってくださった読者のみなさまにとっても（チベット語でよく用いられる表現を援用するならば）暗闇を照らす灯りのような役割を果たすものであったと感じる。

本書のもととなった一次資料にはかなり偏りがあり、少なくとも伝統的なコミュニティ・ベースのフィールドワークとしては模範的なものではない。弁解めいてはいるが、これは筆者と評者をふくめ、現代中国の「少数民族」居住地域、とくに政治的理由からしばしば外国人の立ち入りが制限を受ける地域でフィールドワークを行う研究者が常に直面している問題でもある。筆者は最近、中国でのフィールドワークに取り組んだ各世代の研究者がその体験を吐露し回顧する刺激的な論集に寄稿する機会を得て〔小西 2017〕「人の縁をたぐりよせながら、無理せずできることをする」という姿勢の重要性を指摘した。ただ、結果的に拙著の大半が僧院と僧侶、儀礼についてのミクロな記述に終始していることは、調査条件だけに帰することではなく、筆者自身が以前からもっていた関心の現れでもあったことに改めて気づかされた。

それを踏まえて、個別の論点について応答を試みたい。第一に、特徴的な視座として指摘された「裏方を含めた僧院全体の構造への着目と、それが世俗社会を巻き込む過程」である。拙著のキーパーソンは、カリスマ的な魅力を持って台頭した高僧アク・プンツォであった。有力な宗教指導者が僧院や地域の動態を左右することは、チベット社会にひろくみられる現象であり、筆者も彼に強く魅了されていたことも事実である。だが、多くの「普通」の僧侶が日常的な宗教実践の空間を支えている現状を目にして、高僧の動きだけに注目してはみえないものもある、という印象も常に持っていた。大音量で音楽を鳴らしながらバイクをのりまわすやんちゃな青年が、次の日にはかしこまった顔で僧衣を着

て儀礼の場に座していることへの驚きは、エリートや知識人として一面的に表象されがちな僧侶の内実を描きたいという問題意識を喚起した。また、多様な分業から儀礼の「非日常性」が生成する過程を描きたいという関心は、筆者が修士時代の祭りの調査で培ったものでもあった。

そして、もう一つの論点としての「宗教実践における感覚への着目」である。実のところ、筆者は拙著でこころや身体といったことばをいささかナイーブに使いすぎてしまったのではないかという後悔の念を抱いている。評者がこの論点を好意的にとりあげてくださったのは、フィールドや宗派を異にすれども、チベットにおける宗教実践と身体感覚への共感のチャンネルを有していたからこそではないかと想像している。これが当該地域になじみのない読者にどのように伝わるかは未知数であり、より精緻な身体論への接続が今後の課題である。それは、宗教経験をブラックボックス化しないという、博論審査で与えられた宿題でもある。

次に、評者から投げかけられた問題点に応答したい。拙著の記述をより立体的に立ちあげるには、当該地域のチベット高原東部における位置づけ、なかんずく仏教を含めた他宗派との関係を丹念におさえることが不可欠である。それは、チベット地域研究への貢献という文脈にとどまらず、多民族地域における宗教間ポリティクスの問題にも接続しているからである。評者が指摘するように、シャルコク地方は古来より多様な政治勢力や民族集団が交錯しあう、まさに「コンタクト・ゾーン」である。なぜ結果として「ボン教が仏教の影響を受けずに残った」とされるにいたったのか、そして宗教マイノリティとしてのボン教徒が、ときに差別的なまなざしにさらされながらいかにポジションを確立し得たのか。周辺地域のフィールドワークや文献資料に基づく精密な検証が必要である。

歴史的にみても、ラサのダライラマ政権樹立以降、マジョリティであるチベット仏教ゲルク派に対して諸宗派は多様な生存戦略をとってきた。たとえば、カム地方を中心として19世紀に展開したりメ運動は、ボン教徒をふくむ非ゲルク派がゾクチェンの思想などを中心に集結し、宗派をこえた教えを模索した運動であった。ボン教は、教義から儀礼の意匠まで、チベット仏教と不可分の影響を与えあいながら発展してきた歴史を持つ反面、仏教側からの「外道」ないし「野蛮な宗教」としてのカテゴライズは根強い。それに対して、ボン教徒たちは20世紀後半以降「チベットの土着宗教、本土宗教」というイデオロムを通じて自らのポジションを再構築してきた。

それを可能にした背景とは何か。評者が指摘するような、より上位の政策部門の判断、すなわちチベットとその宗教を現代中国の民族・宗教政策の中に効果的に組み込み管理しようとするモメントがシャルコクの事例に関与していることは疑い得ないだろう。ただ現時点での実感としては、「状況証拠」は多いものの、その核心にせまるような資料が得られていないため、記述をためらったというのが正直なところである。調査方法上の課題も多くあるが、関連する問題として言及しておきたいのは、研究者の言説が果たす役割である。周縁化されていたボン教が研究対象として表舞台に登場したのは、欧米におけるチベット学の展開、さらに中国にその知見を逆輸入しつつ民族論をミックスして独自の発展を遂げた「藏学」によるものであった。これらの知見がローカルな知識人にも共有され、

政策の運用とも関連しながら新たなボン教像を更新していく過程を追うことは、評者の問いに応答するための手がかりたり得るのではないかと考えている。

これは評者が要望して下さった欧語圏での出版とも関連するのであるが、ボン教研究はアカデミックな研究者と、当事者である僧侶をはじめとするボン教徒の距離が相当にちかい（もしくはその境界があいまいである）。研究者による発信がボン教についての理解図式、ひいては他宗派に対するボン教の位置づけに直接影響を与える可能性も高い。こうしたメタ的な意義にも目を配りつつ、まずはお世話になった人たちへの恩返しという意味で、構想を進めていきたいと考えている。細やかな修正点の指摘にも感謝したい。

末筆になるが、別所氏をはじめとする同世代のチベット研究者は、常に刺激をあたえあい、切磋琢磨しあってきたかけがえのない仲間だと思っている。まだまだ課題は多いが、かれらの力なくして拙著は生まれ得なかった。祭り研究にまで言及して下さって応援のメッセージをいただいたことには気恥ずかしい思いがするが、今後の研究の進展への決意を新たにした次第である。ありがとうございました。

<参考文献>

小西賢吾 2017 「チベット族とボン教のフィールドワーク——縁をたぐり寄せ、できることをすること」西澤治彦・河合洋尚編『フィールドワーク——中国という現場、人類学という実践』風響社、pp.137-153。